

## 第18回環境NPOリーダー海外研修 報告書

北九州エコライフステージ実行委員会

泉 香苗

### 1. 訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を 日本のボランティアリーダーとして生かせるか。

ものをいう市民社会のためにー

#### 【環境NPOはパートナー】

ラインランド・ファルツ州環境省の環境情報センター(LZU)のシュターデンさんは、環境省国際交流課において環境とスポーツ・環境教育を担当しています。州法律で、環境団体に関する一例に、「すべての州民が情報を受け取ることができる」というのがありますが、更にNGOとの環境保護について協力しあっているか尋ねると、「計画を練る際にNGO・NPOの助言・意見を求めないといけない」そうです。つまり、ドイツの環境NPOは“ものをいう立場”として認められていると感じました。次に、ヘッセン州環境省の総務広報官のハイケさんへ「あなたにとって環境NPOを一言でいうと何ですか？」と尋ねた時の言葉は、「パートナー」でした。今後パートナーという信頼関係を目指して、まずは自らが、以下のポイントを情報公開し、お互いにないものを補完しあうという団体であるよう、その第一歩として提示していきたいです。

①収支 ②法人格 ③理念 ④理事 ⑤財務 ⑥ボランティア ⑦沿革 ⑧活動テーマ

#### 【環境NPOは専門家】

ラインランド・ファルツ州環境省の環境情報センター(LZU)の Dr.Peter Diehl(ダイール)さんは、生物学者でありながら、ライン川・水質保護担当しています。省職員ではないものの、州のプロジェクト担当として20年同じセクションを務めています。そのことによる強みは、工場・企業とのつながりがあること、またそのことによって、継続的かつ長期的改革を計画・実行できているのだそうです。

環境問題解決には、多岐にわたる視点で長い時間が必要だと思います。BUND、NABU等の理事会組織図を見たとき、地質学者、弁護士、学生(環境ボランティア研修生)等組織の意思決定組織に、様々な専門性を持つ人が参画していました。NPOリーダーとして、市民・NPO・企業・行政をつなぐ変化への柔軟さとより専門性を持つこと。もしくは、自身の団体では補えない専

門性は、外部とのつながりを開拓すること。そのことによって、自身も課題に対する長期的プランニングと実現コントロールを強化していきたいと思います。

## 日本の人材育成の目指すところー

### 【環境は、人が育つ根っこ】

研修参加前の私の課題は、地元の大学との協働プロジェクトを通じて、持続可能な社会づくりのために、地域課題に応えようとする地域の環境活動と若者のマッチング【都市の高齢化】でした。

ところが、ヘッセン州環境ボランティア研修制度(FÖJ)を知り、これまでの取り組みが何のためだったのか、目標へ変わりました。それは、今回の研修ディスカッションの中で仲間が教えてくれたこと＝「やりなおしができる社会の仕組みのために」です。

環境ボランティア研修制度(FÖJ)とは、ドイツにおいて16歳から26歳まで義務教育終了後将来の可能性を見つけるために、研究所・農家・園芸・都市開発プランニング・広報等の現場を体験できる国の制度です。この制度は、「自然環境を学ぶことが一番の目的ではなく、将来の可能性を見つけてあげること」です。州ごと若干違いがありますが、手厚い制度に、若者の環境への関心を高めるようとする国のねらいすら感じます。実は、この制度はフランスとの交換留学生の例だけでなく、ドイツ語を話すことができれば、どの国の若者にも開かれた機会なのです。ドイツの人材育成の“厚み”に感激です。

パルメンガルデン（植物園）のガイドを自ら引き受けた研修生は、過去の研修生の話をもとに前もって自ら調べて「五感で体験することが大事と思ったから」と、カカオやユーカリの葉の試食等体験型のツアーを組んでくれました。終始研修生を、事務局のウリルケ・シュタインベックさんが微笑ましく見守っていたのが印象的でした。「まずは一人でやってみる」環境と受入れ側の信じる気持ちの人が育てることを教えてくれました。例え、研修生がその後どんな仕事を選んだとしても、様々な分野で環境活動の経験を活かしてくれる可能性を感じ、「環境は人材育成の根っこ」と思いました。

また、NABUラインナウアー自然保護センターのエーゲリングさんに、研修生の受入れ先としての感想を尋ねると、「大学卒業後、何をしたらよいかわからないまま来る人がいるが、頭だけでなく身体を動かすから、自然環境に関心が深まり、モチベーションが上がる例もあるよ。」と教えてくれました。

これからの日本も人材育成の中で大切なことは、“自由意志”を育てることだと思います。

ラインラント・ファルツ州アルツァイ市公立の森のようちえんの園長さんが、「普通の幼稚園でなく、なぜ森のようちえんなのか」の理由として、

①自然を体感・知ることができる。②自然の中で生きていくルール・決まりごとを学べる。

森のようちえんだから得られる良さを教えてくれました。出欠確認も子どもたちが行い、お休みの友達を思いやり、その日の遊ぶメニューも子どもたち一人ひとりの投票で決めていました。

研修が深まるにつれて、“環境のための”人材育成と思っていた先入観がなくなりました。そして、人が育つ根っこすべてに“環境活動”や自然環境が介することで、自立性や自己肯定感など生きる力を育てることに気づかされました。今後、私は環境活動や自然体験プログラムを提案する分野を、環境以外にも広げていきます。この提案に納得していただくため、それらプログラムとその効果を数値化し、これまである指標と共有していけたらと思います。

---

## 2. 日本の環境NPOリーダーを支援するために、 どのような仕組みが考えられるか。

---

### 自由意志を束ねる仕組みー

10日間の研修を通して、一番感じたことは課題解決のためのパイプラインの必要性を具体的なイメージとして理解しはじめたことです。

### 【環境提言のススメ】

#### ①環境ボランティアリーダー会リーフレットの定期的な発行と広報活動

環境NPO団体は、既にそれぞれの広報ツールを持っていると思います。そこで、あるフォーマットに沿って環境ボランティアリーダー会参加団体PRリーフレットを定期的に発行することをご提案いたします。例えば、日本の環境NPO全体の動向として情報発信する、プレスリリースとして活用します。また、環境NPOが提言する存在として強くなっていくことを目指して、その冊子が各団体の活動目的を共有する手助けとして活用します。これは、活動範囲である地域の枠を越えて環境政策提言をする、パートナーをマッチングする仕組みとなると考えます。自然保護、環境教育、農業など活動分野ごとにまとめると、情報の受け手にわかりやすいかもしれません。

NABUベンツハイム自然保護センターのゲルハイト・エプラーさんの最初のご挨拶で「日本のNPO・NGO活動はたくさんあるけど活動地域のみ。政治活動をするには、活動範囲を広げてはと思います」というアドバイスをいただきました。このとき、地域色ある日頃の環境活動に加えて、活動範囲が地域の枠を越える意義に気づかされました。そして、NABUラインヘッセン・ナ

一エで見つけた地域のボランティア活動を束ねたリーフレット『Eisvogel2015』にヒントを見つけました。

リーフレットの発行元は、環境NPOリーダー会です。またその冊子をリーダー会全体のファンドレイジングツールとしても使います。すると、この冊子に象徴されるパイプラインの仕組みは、環境NPOリーダー会が毎年決めるテーマに沿って、会に集まった寄付金が地域(各環境NPO)へ循環させるものとなります。このような仕組みにおける冊子は実行する地域ネットワークのバトンになると思います。

### 【環境NPOブランディングの意義】

#### ②合意形成のためのネットワーク化

NABUとは、野鳥保護を目的に設立された会員数56万人の自然環境保護団体です。以下の組織構成は、意見を集約し反映する流れです。

<会員→地域→州→国→EU>

16の州には、財団とNPOのそれぞれがあり、毎年のテーマや保護を呼びかける野鳥を決める理事会の理事の選出は、「民主主義のボトムアップ方式」です。この流れを、環境NPOリーダー会というネットワークに置き換えてみると、地域の環境NPOが各々会員を募るということが一団体の組織運営のためだけではない、もっと大きな意味に気づかされました。

また、リーダー会に所属する環境NPOの分野が多岐に渡ると、提案する社会の窓口や切り口が増えるという可能性にも気づきました。

それぞれのNPOの組織運営から一歩踏み出して、ファンドレイジングを通じて、環境NPOリーダー会から、日本の環境の合意形成のパイプラインを目指すというのはどうでしょうか。

会員を増やすだけでなく、活動に参加してくれる人も増やす。各NPOが一団が行うより遥かに速いスピードで、会全体としてみたときに会員の少ない地域は減ることでしょう。この可能性は、地域住民のニーズを掬い上げ、“声”にして集める日本の環境の合意形成のネットワークです。

今回の研修すべてを通じて、会員は、“顧客”であり、ロビー活動につながる“同志”であり、“声”であると学びました。

ドイツにおけるBUNDやNABUを目指して、環境NPOリーダー会に参加する各NPOの後ろに、このような大きな“声”を、それぞれの地域に見せることができれば、各地域で環境NPOは“見える力”であるといえるのではないのでしょうか。

---

### 3. 全体を通しての感想

---

料理家・辰巳芳子さんの言葉「行き詰まりは、異文化で洗うと突破口が見つかりやすい」を心にともして、ドイツ海外研修に挑みました。この10日間、何かをためたのではなく、ドイツの環境NPOリーダーのみなさんや18期生のみなさんとの分かち合いの毎日でした。また研修先の一つ、デュッセルドルフの風景を目の当たりにした時は、ドイツ住民の中にも、私たちと同じようにいろんな考えがあると考えさせられました。

そして、ドイツが環境先進国といわれるのは、研修先でお会いできたドイツの環境NPOのみなさんが自然環境に対して愛情をもって向き合い、そのことを住民に真摯に伝える力と実行力にあると感じました。

私の大好きな宮沢賢治『ポラーノ広場』に、次のような言葉があります。  
—ぼくはきっとできると思う。

なぜならぼくらがそれをいま かんがえているのだから—  
この約10日間、キーワード・課題解決・再発見を繰り返し・繰り返し考え、語り合うことを積み重ねました。あとは、日本において“感動で恩返し！！”ができるように一つひとつ行動します。

最後になりましたが、ご支援をくださいました一般財団法人セブン・イレブン記念財団様、このようなダイナミックな研修の機会と出会いをありがとうございました。そして、「チームササキ」18期生のみなさん！今回の10日間という時間の積み重ねをきっかけに、みなさんの地域の取組み・思いを理解する一人でありたいです。「ありがとうございます」と「よろしく願いいたします」の言葉と共に、これまでとこれからの未来をつなげていこうと思います。